

ミキ先生を偲び

草野 幸子

武田ミキ先生のご逝去のことを新聞で知り、また先生が九十二才という御高齢でいらつしやつたことを知りまし
たとき、先生が一世紀に近い長い人生を生きぬき、教育に生涯を捧げられ、また大きな業績を残されたことに今更
ながら大きな感銘を受けております。

私は昭和三十八年、食物栄養科が新設されたときに、スタッフとして参加させて戴きました。昭和三十八年とい
えば丁度三十年前、はじめて広島の可部を訪れ、裁縫学校から出発して女性の力で大学を築き上げられたことに驚
いたものです。一身上の都合で広島をさるまで、わずか二年半ほどの生活でしたが、ミキ先生に教えられたことは
少なくないものがあります。一言でいえば教育に対して信念を貫くという先生の御姿勢でした。三十五年前に六十
二才で亡くなった私の母も、思えばミキ先生より五年ほど年長だったはずですが、母も当時の女性としては先進的な
生き方をして、佐賀師範を了え小学校の教師として二十年ほど働いたことがございました。皇室へ外交官として活
躍された小和田雅子様を迎えられる現代の日本と違い、封建的で貧しかった日本の中で、女性の力で教育の道を突
き進まれ、若者を教育する場として裁縫学校から大学、大学院へと築き上げられた業績の大きさは計り知れないも

二、教育一途の人

のがあります。とても厳しい生き方だったと思います。私は母の姿を重ねて尊敬の念を禁じ得ませんでした。

しかし先生の日常生活は質素そのものだったことを覚えております。紙一枚、鉛筆一本も粗末にされず、先生のお住居も当時とても質素だったことを覚えております。これは今から三十年前、昭和四十年ころのことで、あれから三十年間の間には先生のお暮らしもいろいろ変わったことがありませんが。

九十二年間、教育に生き、教育に死すというミキ先生の御生涯を思いますとき、その教えを受けた私たちがその教えを無にすることなく今後も生きることが先生へのご恩返しだと思います。どうぞ安らかにおやすみ下さいませ。